ぶらりわが街宮沢界隈

⑨　日本軍機退避していた防空壕に墜落で犠牲者

昭和16年(1941)12月8日より、日本はアメリカ等へ戦争を始めた太平洋戦争は時が経過すると、次第に不利な立場となり、昭和19年(1944)7月サイパン島が奪われると、戦局が大きく変化し、米軍機によって空襲が本格化し、さらに昭和20年(1945)2月の硫黄島占領により、なお一層空襲が激しくなった。同年3月10日には東京が大空襲を受け、10万人もの犠牲者がでた。

昭島は航空関係の工場が建ち並び、米軍機の攻撃目標とされ、空襲は13回、犠牲者は29人、特に昭和20年4月4日のB29による焼夷弾(しょういだん)の投下等により、拝島・中神地区で20名の多くの犠牲者が出ています。

そのうち空襲とは違う日本軍機が墜落し、搭乗員2人・退避壕に避難していた2人の計4人が即死した出来事が宮沢地区でありました。昭和20年4月19日、立川陸軍航空技術研究所の研究技師渡辺誠一(陸軍中佐)五十嵐宗一(陸軍伍長)の2人で立川飛行場から試験飛行に飛び立ったが、米軍戦闘機4機(P51)に銃撃を受け必死に逃げたが逃げ切れず、午前10時頃宮沢地区(現在の奥多摩街道谷下バス停付近)の公共防空壕に墜落し、退避していた民間人2人が巻き添えとなった悲しい出来事で、民間人犠牲者の2人は、拝島村住・清水孝吉(49歳)で木炭の配給のため中神方面からの帰りの途中で犠牲に。渋谷から五日市に疎開していた・向笠馬吉(39歳)でリヤカーを付けた自転車で渋谷に残した家財道具を運びに行く途中で犠牲に。

○　昭和12年(1937)、昭和飛行機設立程なく自動車交通路の必要上から、宮沢の諏訪神社と阿弥陀寺の境界を縦断して、会社の正門前に至る幅11mの幹線道路(現・都道162号線通称・諏訪松中通り)を新設した。

○　今でも残る防空壕の跡―中神坂近くの奥多摩街道脇の石垣(福厳寺の崖下)に、空襲時に退避するために作られた防空壕の出入口跡が残っています、昭和19年(1944)末に掘った横穴状で、長さ10m・高さ1.5mほどの大きさで20人くらい入れました。

○　多摩地区の空襲による犠牲者は1536人―昭島市は29人、最多は八王子市 476 人、次に立川飛行機のある立川市347人、中島飛行機のある武蔵野市239人、日立航空機のある東大和市109人、と軍需工場を抱えた市が100人以上の犠牲者を出している。

○　昭和飛行機のある昭島市は武蔵野市、東大和市の航空機工場に比べて比較的被害が少ないのは、これは占領後アメリカ軍が飛行場を使用するため滑走路周辺の爆撃を控えたため、既にアメリカは戦後の事を考えて爆撃目標を選んでいた。

○　昭和飛行機への空襲が少なく、ほとんど無傷で終戦を迎えた理由

①　発動機を作らなかった―B29の第一目標は発動機の製造工場　②　飛行場(滑走路)を持っていた―占領後米軍が使用するため　③　アメリカダグラス社との関係―昭和飛行機は会社設立時に技術提携を持ち、主力飛行機もダグラス社が設計した輸送機

記　　防犯宮沢支部会計　西山　禎一

昭和２０年８月の昭和飛行機東京製作所配置図